



「石岡のおまつり」は正式には「常陸國總社宮例大祭」といい、創建千年を誇る古社・常陸國總社宮の最も重要なおまつりです。「関東三大祭り」の一つとも言われており、菊花紋を許された格式ある大神輿をはじめとして、絢爛豪華な山車や勇壮な幌獅子など40数台がJR石岡駅周辺を巡行します。おまつり期間中の三日間に50万人を超える見物客が訪れます。

神幸祭 9月19日

總社宮の御分霊が大神輿にて年番町の仮殿へ渡御します。
午後2時、花火を合図に大神輿の渡御となり、供奉行列を組んで年番町の仮殿へ向かいます。

奉祝祭 9月20日

午前11時から總社宮境内では奉納相撲が行われ、午後1時過ぎに神楽殿では巫女舞と染谷十二座神楽が奉納されます。午後3時からは幌獅子大行列、午後6時45分から山車大行列が駅前で行われます。

還幸祭 9月21日

午後2時、年番町の仮殿より大神輿が出御し、神幸祭と同じ供奉行列にて本殿へ還御します。
全町の幌獅子は、大神輿の供奉をした後、御分霊の還御を待って町中へ戻ります。大神輿が本殿に着御すると、還幸祭神事、年番町の引き継ぎが行われます。

おまつり ひとくちメモ



年番制度

石岡のおまつりは、毎年交替で務める年番町を中心に行われます。この制度は、明治35年(1902)に確立しました。

年番町は、おまつり終了時から次の年番町に引き継ぐまでの1年間、神社への奉仕に努めます。年番に加盟している15町内が、各年ごとに交代でその年のおまつりの年番となり、年番町には仮殿が設けられます。

今年の年番町は、森木町です。

大神輿

明治30年9月9日石岡市青木町の棟梁小井戸彦五郎によって制作され、平成9年9月9日栃木県下野市の神輿師小川政次によって修復されました。

ささら

格式高く「7度半の迎えをうけて出る」と言われ、神輿の露祓いの先頭に立ちます。神社札・稲穂・榊等を飾り、紺地に八咫烏を染めぬいた幕を張った屋台で、異様な顔の3匹の獅子が操られながら舞う姿は独特の雰囲気があります。總社宮・仮殿などでは、屋台の外での舞が奉納されます。

3匹の獅子は、老獅子・若獅子・女獅子と呼ばれています。獅子頭は全体に黒漆が塗られ、目・歯に金箔が施され、咽頭部は軍鶏の羽で覆われており、老獅子・若獅子には特異な太く長い角がついています。

幌獅子

車輪を付けた車体の上に小屋を作り、布の幌(胴幕)をかけます。幌の色は通常2色で、各町独自の色を使います。この先端に獅子頭を付け、1人でかぶり持ち、舞いながら進みます。獅子頭の大きさは各町によって異なりますが、およそ幅50～60cm、重

さは20kg前後です。小屋(標準の大きさで幅2m・奥行5m・高さ2.5m)の中には囃子連が乗り、大太鼓・小太鼓・笛・鉦で奏します。

小屋を付けた幌獅子は全国でもめずらしいもので、石岡のおまつり特有のもので

山車

屋根のない2層または3層建てで、1層が勾欄と呼ばれる手すりを巡らせた舞台になっています。石岡囃子に合わせ、面を付け衣装を着た踊り手が、様々な仕草を演じます。

上層には、各町独自の2mもある人形が飾られています。隣には低い電線や伸びた樹木から人形を守るために刺股を持った人が乗り、人形守とも呼ばれています。

台座には、直径40cm～50cmの四輪と長さ30m以上の曳綱が付けられ、祭衣装の青年たちによって曳かれます。

石岡囃子

囃子連は15人程度で編成されます。

おまつりの朝に青年、子どもたちが集まり「さんぎり」という曲を始めると山車の出発です。「さんぎり」は、山車の出発時と帰着時に奏し、踊りはありません。その他の曲は、おかめ(四丁目)・ひょっこ(仁羽)・きつね(新馬鹿)とあり、大太鼓(長胴)1・小太鼓(メ太鼓)2・笛1・鉦1によって奏され、面を付けた踊り手によって面白おかしく踊られます。

おかめは、静かな曲でゆっくり踊られます。

ひょっこは、滑稽な仕草で見物客を笑わせます。曲もリズムカルで、面も「大笑」・「一文字」・「べろ出し」等があります。

きつねは、テンポの速い曲で「切返し」と称し、大切り・中切り・乱拍子と変化に富んでいます。当然踊りも勇壯で2匹、3匹と出てくるともありません。

